

実践報告 聴覚障害生徒を対象とした「作文を題材としてことばの表現を考えるためのワークシート集」の作成と活用

著者	金子 俊明
雑誌名	筑波大学特別支援教育研究
巻	11
ページ	25-30
発行年	2017-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00151614

聴覚障害生徒を対象とした「作文を題材としてことばの表現を考えるためのワークシート集」の作成と活用

金子 俊明*

生徒の作文に見られたことばの表現に着目して、「ことばの表現を学ぶためのワークシート集」を自作し、実際の学習に活用した。2006年から2016年にわたるこのワークシート集の活用を振り返ると、ことばの表現を考える学習に対する生徒の興味は高く、幼稚部・小学部の「話し合い活動」を基礎にして、中学部では「読み書きの学習」として総合的に展開できることが確認できた。

キー・ワード：聴覚障害 確かな日本語の育成 ことばの表現 教材作成 ワークシート

I はじめに

聴覚障害児を対象とした学習においては、生徒の学校生活の中から学習の題材を見つけて教材開発を行い、実際に授業を行った後、振り返りと評価を経て、次の学習に生かす取り組みが行われている。日本語の学習については教育課程の中で言語活動を重視し、読解力を育成することも現代的な教育課題の一つである。この観点から日本語教材の自作について金子ら(2006)は、本校中学部生徒の作文中のことばの表現に着目して、生徒自身が作文の表現を修正する学習を行った。この学習は、生徒のことばの表現のつまずきに着目して、より適切なことばの表現を考える学習であり、有友ら(2008)による電子黒板を活用した実践研究の一部としても位置づけられた。これらの実践事例に関する検討結果は、筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部(2010)及び筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部(2012)において報告した。いずれの検討においても、ことばの表現を題材とした学習への生徒の興味は良好であり、生徒が聴覚特別支援学校の学習の中で体験してきた話し合い活動の延長線上にある学習とみなすことが可能であった。一方、このような身近なことばの表現を考える学習を継続的に行うには、まとまった自作教材が必要であった。そこで、学校生活の様々な場面に関する生徒の作文から得られたことばの表現の実例を集めて拡充し、新たなワークシート集を作成した。この「作文を題材としてことばの表現を考えるためのワークシート集」の概要と、この教材を実際に活用した際の生徒の様子(2006年～2016年：延べ101

名)について述べる。

II 「作文を題材としてことばの表現を考えるためのワークシート集」の作成

本稿で紹介する教材作成・実践のコンセプトは、生徒の身近な生活の中から学習の題材を見つけて生徒にフィードバックすること、すなわち、「みんなで作ってみんなで学ぼう」という協同的な取り組みを実現することである。聴覚特別支援学校では確かな日本語の力の育成が大きな課題であるが、生徒の日本語の力は個人差が著しい。他の教育現場では様々な学年の市販の問題集を選択してドリルとして活用することも行われている。しかし、指導を受ける生徒の側から考えると、かなり学年が下がったドリルであったり、文章の内容が必ずしも興味を持てるような教材ではない場合もある。生徒の興味が持続し、もっと学びたいと思えるような教材が望まれる。そこで、過去の生徒の作文の表現の例を題材として取り上げ、教師が問題文自体を生徒の状況に合わせて自作することで、生徒が取り組みやすい教材とすることに取り組んだ。

実際のワークシートでは、一つの場面に関連する生徒の作文の中からいくつかの特徴的な表現を抜き出し、それらを用いて200字～400字程度の文章を自作した。そして、その中に出てくることばの表現について考える設問を用意した。なお、問題文と設問の作成にあたっては、金子(2011)による読解リテラシーに関する実践的検討を参考にした。すなわち、「情報の取り出し」「幅

*筑波大学附属聴覚特別支援学校

広い一般的な理解の形成」「解釈と各部分の理解」「内容の整理・意見の形成」「文章の形式・表現の評価」等のプロセスに応じて、「語句の抜き出し」「空所補充」「意見や理由の説明」を求める設問とした。この自作ワークシート集「ことばの表現を学ぼう」(Ver2.0)には、学級での指導もしくは自立活動で用いる教材として、問題文シート 20 例、全 100 問を盛り込んだ。

Ⅲ 教材の活用と評価

1. 自作ワークシート集について

(1) 各ワークシートの構成

「ことばの表現」に関するワークシート集では、学校生活の中で見られたエピソードを中心として生徒の作文に見られた表現等を題材とした。実際のワークシートは見開き 2 ページを 1 組として構成した。1 枚目は写真とイラストを示し、次のページの問題文を読むための興味を高めることを意図した。このページはデジタル化した際に、電子黒板で拡大提示することを前提とした。2 枚目は実際に生徒が読んで答えを書き込むためのワークシートである。問題文は生徒の作文や教員が自作した文を組み合わせた。題材としたのは、学校行事(林間学校修学旅行、陸上大会、文化祭等)、学級での製作(カルタ、招待状など)、学習発表会(総合的な学習の時間など)、テーマを設定した作文等であった。複数の生徒の作文に見られたことばの表現を紹介するかたちで問題文を作り、文中の空所に適切なことばの表現を入れることを課題とした。回答のしかたは、選択肢式、単語の補充等も組み合わせた。さらに、問題に応じたヒントも付け加えた。

(2) ワークシートの問題文とその活用のしかた

ワークシート集の「林間学校に関する作文の表現」の場合は、次のような問題文を作った。

Dさんは、「道が険しく、『もういやだーっ。』とあきらめかけた時、先輩が『あきらめちゃだめだ。』と、(①)くれた。」と述べました。当日、頂上では虹がみんなを待っていました。…コテージでは食事作りがたくさんありました。Eさんは「…(②○○○○舞い)の三日間で、気がつくともう帰りのバスだった。」と書いています。充実した時間はあっという間に過ぎるものです。…(一年生の)Fさんは、今年の林間学校を振り返って、「二年生のように、来年は私たちが(③)したい。」と書きました。

中学部の林間学校では毎年、登山と食事作りが特徴に

なっており、生徒にとっては印象深い行事である。作文では体験を通した生の感想やことばの表現が見られ、自分の体験や印象と比べながらことばの表現を予想することを課題とした。

設問では、②ではことばの字数を示し、③では「カタカナ 3 文字」というヒントをつけた。状況や心情を示す表現は一つではなく多様であり、そのニュアンスが重要になる。この課題では、文を書いた生徒の気持ちになって、もとの表現を予想することを求めた。①は「はげまして」、②は「てんでこ舞い」、③は「リード」が原文の表現であった。

このような自作ワークシートを活用した学習の記録の中から、後述する文化祭に関する学習での活用例を紹介する。Fig.1 はワークシートの 1 枚目のイラストを提示した際の情報付加の例である。できるだけ簡単なことばを付加して、問題文を読むことへの抵抗感を減らすようにした。また、Fig.2 は電子黒板を用いて問題文を拡大提示した際の記録の一部である。生徒からの応答に応じて、下線やことばの表現を書きながら学習を進めた。次に述べる実践事例では、空所補充の実例と教材活用時の生徒の様子を述べる。



Fig.1 自作ワークシート活用時の手書きの情報付加の例

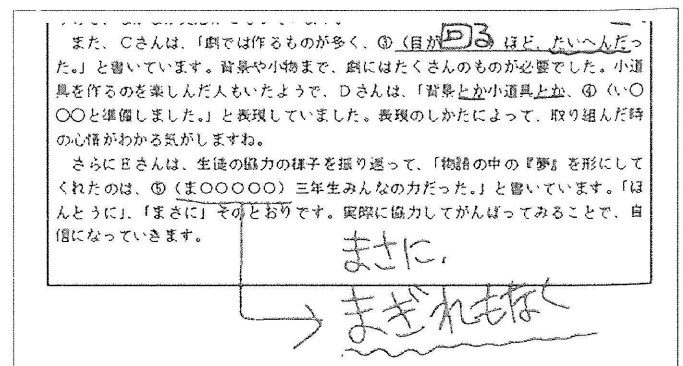


Fig.2 自作ワークシートを活用した学習の記録から

2. ワークシートを活用した実践事例

(1) 「文化祭に関する作文の表現」を題材にした学習

【問題例】

Aくんは、「劇の一日目は、④(さ〇〇〇)緊張したが、二日目はミスが減った。」と劇への取り組みを作文に書いています。…劇への取り組みの様子について、Bさんは、次のように書いていました。「一日目が終わった後は、⑤『(〇〇〇)』という効果音が聞こえた気がするほど、皆、落ち込んでいた。二日目はなんとか成功。」効果音での表現というのなかなか実感がこもっています。…Cさんは「劇では作るものが多く、⑥(目が)ほど、たいへんだった。」と書いています。背景や小物まで、劇にはたくさんの方が必要でした。小道具を作るのを楽しんだ人もいたようで、Dさんは、「背景とか小道具とか、⑦(い〇〇〇準備しました。」と表現していました。表現のしかたによって、取り組んだ時の心情がわかる気がしますね。さらにEさんは、生徒の協力の様子を振り返って、「物語の中の『夢』を形にしてくれたのは、⑧(ま〇〇〇〇〇〇)三年生みんなの力だった。」と書いています。

上記の文中④は「さすがに」が答えであった。これまでの生徒の回答状況を見ると、文中の一日目と二日目の状況を比較することで回答できた生徒が多かった。⑤は「ガーン」という表現であり、生徒の作文には擬態語・擬音語による表現も多く、イメージしやすいようであった。また、⑥は「(目が回る)ほど」、⑦は「いろいろ」、⑧は「まぎれもなく」という表現であった。⑧の表現を「まさに」や「ほんとうに」と書かずに、「まぎれもなく」としているところに、もとの文を書いた生徒の語彙力が反映されている。学習ではこの文を読んだ生徒が⑧の表現を理解できるかどうかポイントであった。

【教材活用時の生徒の反応】

「文化祭の思い出」に関する表現では、生徒35名の回答をみると、「目が(回る)ほど」という表現や擬音語の表現はほとんどの生徒が正答できていた。「(まぎれもなく)」という表現については正答率にばらつきが見られた。年度によっては、「『まさしく』という意味だけ…」『まことに』じゃ、字の数が違う」等のつぶやきもあった。また、なかなか答えが出なかった際に、たまたま正解の生徒が出ると、「(そのことばは)どんな時に使う？」という質問もあった。

(2) 「弁論大会に関する作文の表現」を題材にした学習

【問題例】

弁論大会で…Bさんは、海外旅行について話しました。小さな日本を抜け出して冒険の旅へ。世界のスケールに感動したり、歴史の(⑨ しさ)を実感したいと考えたそうです。…また、Dさんは…コミュニケーションについて発表しました。…友だちが悪口を言っていると思ったことがあったそうです。しかし、後で(⑩)がとけて、一緒に活動できて楽しかったそうです。「友だちは大切な(⑪)」になっているそうです。⑨は「楽しさ」、⑩は「誤解」、⑪は「たからもの」という表現である。生徒の感覚では⑨は「深さ」「広さ」といった表現が返ってくるがあったが、ヒントの「〇しさ」という枠組みにはぴったりせず、後に出てくる「実感したい」という表現が考える際の手掛かりになっていた。また、⑪の表現はコミュニケーションに関わるもので、生徒にとっては気になる話題の一つになっている。

【教材活用時の生徒の反応】

「弁論大会」に関する問題について、かつての中1・2生徒27名の回答を見ると、文中からの抜き出しに関する正答率は高いことが共通していた。⑨の「楽しさ」は容易に推測できたようである。⑩も同様で、「同じ経験がある」と言った生徒も見られた。また、⑪の「友達は大切な(宝物)」という表現については、答えは分散し、「きずな」「支え」「仲間」「存在」といった回答も見られた。いずれも、内容を理解したうえで表現を探していることがうかがえた。場合によっては、正解の表現よりも深みのある表現も出された。かつての一斉指導時には、「(これは)よくある表現」と感想をもらした生徒もあったが、「だからこそ大切」という発言もあった。

(3) 「カルタ作りの学習」を題材にした学習

【問題例】

以下に示した例は、カルタ作りを題材にした学習に関する問題の一部である。この学習は、頭文字を選び、簡単なことばの表現を考えてイラストを描き、自作のカルタを作る学習であった。

…Aくんは、「う」といった時、「(⑫う) 6月の梅雨は もういやだ。」と書きました。Bさんの「く」は「苦労が 水の(⑬)」というものでした。苦労は無駄にならないようにしたいものです。Cさんは「せ」と言われて「先生の(⑭)が気になる生徒」と書きました。なるほど、気持ちがわかります。…

同じ学習をした時、ほかの友だちは何をどんなふう

考えていたのかを知ること、ことばの表現を考える際に重要な手がかりになり得る。⑫は「うっとおしい」、⑬は「あわ」、⑭は「目」であった。

【教材活用と生徒の反応】

もとのカルタ作りの学習では生徒は楽しんで製作を行っていたが、それをなぞって考えることができるかどうかポイントであった。ある年の中2生徒の回答状況を見ると、⑫については「うんざりだ」「うるさい」等の回答もあった。⑬及び⑭については多くの生徒が正解であった。⑭については、「やっぱりね。」というように共感した感想も得られた。ことばの表現を見直す際にそのベースとなる気持ちをなぞってとらえ直す活動は効果的であった。同様に、ワークシート集の中では学習後の意見文・感想文や総合的な学習の時間の発表等のエピソードも教材化した。

(4)「部活動に関する作文の表現」を題材にした学習

【問題例】

部活動に関する作文を題材とした問題文では6人の生徒の作文の表現を紹介した。以下はその一部である。

対戦相手は「メチャクチャに強いチーム」の場合もあったそうです。こんな時、顧問のB先生は、「一人一人の勝つ気持ちと、チームメートへの⑮（

）を忘れるな。」と励ましました。また、陸上競技について、C君は「完走できてよかった。走るのが好きだ。」と書きました。大会では試走の時よりも記録が良くなることもありました。競技ですから、確かに他の人と競ってはいるのですが、むしろ自分の⑯（

）とのたたかいであるともいえます。…バレーボールの場合も含めて、F先生は「どの部活動でも、⑰『（

）をつくす』ことが大切。」と書いています。努力した分だけ、明日の自分はさらに成長していきますね。

もとの表現では、⑮は「信頼」、⑯は「記録」、⑰は「ベスト」であった。この中では⑮のことばの表現を文脈に沿ってどのように予想するのがポイントであった。

【教材活用時の生徒の反応】

部活動に関する問題では、中3生徒20名の回答では、「チームメートへの（信頼）」という表現に対して、当該の部活動に属していた生徒の正答率は高かった。また他の学年の生徒からは「声援」「感謝」という表現も得られた。文脈に沿って表現を考えていたことがわかった。また、⑰の「(ベスト)を尽くす」という表現に対する正答率は高い傾向が見られた。部活動に関するエピソード

ドでは、どんな場面で誰がどんな発言をしたのかを教師のほうでは忘れていても、生徒はよく記憶していることがわかった。いつも聞いていることばや使っていることばの表現は記憶に残りやすく、ことばの使用頻度の影響があることを確認できた。

(5)「中学部の生活を振り返ると…」を題材にした学習

このワークシートは中学部での生活に関する7人の生徒の感想を紹介したものであり、活用時期は中3の3学期に設定した。

【問題例】

Aさんは、「三年間、良いこともあれば悪いこともあった。様々な出来事が次々に脳裏に⑱（

）」と述べました。Bさんは、学習について、「勉強もたくさんあり、テストが近づくにつれてパニックになった。」と書きました。また行事について、Cさんは「⑲（

）や、わくわくがたくさん。」と表現しました。…部活動では、他の中学校との合同練習に参加して、自信を取りもどすことができたことを作文に書いた人もいました。…Fくんは、「一緒にがんばった友だちは⑳（

）やさしさを見せてくれた。」と述べました。自然にあらわれる様子に、友だちのやさしさを感じ取れるというのは、感性が豊かな証拠です。

⑱の表現のヒントは字数を示した「○○○○る」、⑲は「4文字で」、⑳のヒントは「さ○○い」であった。答えは、⑱「脳裏によみがえる」、⑲「どきどき」、⑳「さりげない」であった。㉑のニュアンスは難度が高いとも考えられた。

【教材活用時の生徒の反応】

「3年間の生活を振り返る」というワークシートは、中3の3学期に扱った。かつてワークシートを3年間継続して活用した学年では、中1の1学期の時点と比べて、中3の3学期では生徒自身のことばに対する感性に変化も見られた。また、「(さりげない)やさしさ」という表現は、かつては理解が難しかった生徒が多かったが、ここ2～3年の結果では正答率も良好であった。これは、デジタル補聴器や人工内耳を活用する生徒が増えたため、耳から入ってくることばの情報量が増え、ことばの語感に関する感覚が向上してきていることが示唆される。

IV 考察

1. ワークシート集の活用評価

本稿で紹介した教材と生徒の反応は、聴覚障害生徒の日本語の力の実態を具体的に示したものであるといえる。そして、ことばに関する感性や理解が必ずしも不足しているわけではない実態も確認できた。これは、乳幼・幼稚園部・小学部の継続した言語指導によって培われたものであり、中学部段階でも保持されていることがわかった。また、身近なことばの表現を題材としたワークシートを用いた学習は、生徒の興味・関心を高め、取り組むことへの意欲を促進するとともに、「どのように考えて解答したのか」についても、話し合いを通して表現を比べて考える学習が継続できることがわかった。ワークシート集の問題文は学校行事や総合的な学習の時間等の場面別に組み立てたところが特徴であり、生徒のエピソード記憶に焦点を当てたものであった。国語の文法のように、助詞・動詞・形容詞・接続詞・授受表現というような区分はしなかった。ことばを活用する場面ごとに、過去の生徒のことばの表現を考えるという問題設定であったため、生徒が考える際の予想範囲を自然に狭めるかたちになり、思考の焦点化を図ることができたと考えられる。生徒にとっては取り組みやすい課題であったといえよう。しかし、内容は必ずしも簡単なものばかりではなかった。このように、生徒の生活に身近な題材を取り上げ、問題文自体を生徒の状況に合わせて自作することは特別支援学校ならではの展開であり、生徒自身の興味を高めて思考を活性化させることに役立つと考えられた。

2. ことばの表現を考える際の生徒の思考過程

ことばは意味と用例を理解していなければうまく活用できないのは事実である。しかし、それらがたとえ完全ではなくとも、推量しながら用いることばを探して、状況に合わせて活用しながら変更していくことは自然な営みである。ことばの意味がわからないから使えないのではなく、フィードバックしながら進めることに自信を持たせることが重要であろう。文脈に沿った活用のしかたを体得できるようにするための指導をさらに継続することが望まれる。

今回のようなことばの表現に関する空所補充の課題を、他覚的な観点から調べる取り組みも試みた。金子(2013)は、イラストと文が混じった読みの題材について、生徒がどこに着目して読み進めているのかをアイカメラを用いて検討した。中3生徒6名を対象とした実験的な検討から、生徒の視点は文中のキーワードに着

目する例が多いこと、主語と述語の連なりへの着目が共通していること、イラストへの着目時間が長いこと、イラストと文を対応させながら読み進める例があること等がわかった。日本語の読み方に関する方略が生徒の頭の中に形作られているかどうかを知り、それを指導に還元することが求められる。

では、逆に読みの方略が不完全で理解語彙が少ない生徒の場合はどうなのかということ、前述のようなワークシートを用いた一斉指導の場面では、話し合いや友だちのことばの表現の実例を知ること、語彙を拡充しようとする姿勢が見られた。ここでも、生徒は幼稚園部・小学部で身に付けた話し合い活動のスキルを活用してことばを学び続けようとする様子が観察できた。ただし、学習内容の定着の面では個人差が大きく、生徒の実態に合わせた反復練習が必要であることも実感できた。

V 今後の課題

自作ワークシート集「ことばの表現を学ぼう」について、その概要と活用状況について述べた。生徒による評価は概ね良好であり、それぞれの生徒が頑張っている様子を直に確認することができた。今後の教材作成を考えると、質の良いイラストや解説ページの検討、ことばの用例の拡充が求められる。特に、問題を一回解くだけに終わらないようにするには、考え方をより丁寧に扱うことが求められる。また、ICT活用について考えると、今回のワークシート集の各課題をPDFにしてタブレットPCに組み込み、個別に活用することは容易である。筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部ICT活用研究グループ(2016)が示したように、ワークシートをタブレットPCに入れた上で、アプリと合わせて活用することにより、付加情報を活用して個に沿った進度の学習を進めることができよう。さらに、既習の知識の定着を促すには、今回作成した教材データを生徒の状況に応じてどこでも何度でも学べるようにすることが次の課題になっている。

【文献】

- 有友愛子・山田隆昌・半沢康至・金子俊明(2008) 聴覚障害生徒を対象とした読み・書き・計算に関するe-黒板用教材の試作. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 30, 28-33
- 金子俊明・廣瀬由美・伊藤僚幸・有友愛子・田万幸子・藻利國恵(2006) 聴覚障害生徒を対象とした「作文直し」のためのパソコン教材の製作と電子情報ボードによる活用. 筑波大学附

- 属聾学校紀要, 28, 45-49.
- 金子俊明・廣瀬由美・渡邊明志 (2008) 聴覚障害生徒に対する作文指導におけるマルチメディア教材の効果—e- 黒板を活用した作文の修正を中心に—. 障害科学研究, 32, 185-193.
- 金子俊明 (2011) 聴覚障害生徒の読解リテラシーに関する実践的評価についての一考察. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 33, 47-51.
- 金子俊明 (2013) 筑波大学免許法認定公開講座 聴覚障害の指導法 聴覚障害の指導の実際 4 配付資料.
- 中野善達・根本匡文 編著 (2008) 『聴覚障害教育の基本と実際』. 田研出版, 東京
- 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部 (2007) 聴覚障害児の言語力向上をめざしたデジタル教材に関する研究. 平成 18 年度松下教育助成成果報告集, 174-177.
- 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部 (2010) 『教科指導と読み書き・ICT 活用—中学部における実践事例—』. 聾教育研究会
- 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部 (2012) 『学習指導の工夫と ICT 活用—続・中学部における実践事例—』. 平成 24 年度 (第 39 回) 聴覚障害教育担当教員講習会中学部資料 (電子書籍)
- 筑波大学附属聴覚特別支援学校中学部 ICT 活用研究グループ (2016) 『大学生とのワークショップによる日本語の読み書きに関する ICT 教材の作成と活用』 (小冊子)
- 四日市章監修・聾教育実践研究会編著 (2012) 『はじめの一歩—聾学校の授業—』. 聾教育研究会

Development and utilization of “Worksheets for thinking about verbal expressions based on student's compositions” for hearing impaired students

Toshiaki KANEKO *

* University of Tsukuba Special Needs Education School for the Deaf